



新板
御
依
婢
子



入道 13
1639
11



らその神をあらわすものなり。その神のあらはるる
るに、その神のあらはるるに、その神のあらはるる
とをあらわすものなり。その神のあらはるる
の書に、その神のあらはるるに、その神のあらはるる
他の文、何れも、その神のあらはるるに、その神のあらはるる
大和物語、その神のあらはるるに、その神のあらはるる
後、その神のあらはるるに、その神のあらはるる
と、その神のあらはるるに、その神のあらはるる
ハ、その神のあらはるるに、その神のあらはるる
思ふ、その神のあらはるるに、その神のあらはるる

ぐ、その神のあらはるるに、その神のあらはるる
よ、その神のあらはるるに、その神のあらはるる
ひ、その神のあらはるるに、その神のあらはるる
あ、その神のあらはるるに、その神のあらはるる
か、その神のあらはるるに、その神のあらはるる
て、その神のあらはるるに、その神のあらはるる

平時寛文六年 正月 酉月 日

瓢水子松雲居士自序

伽婢子松雲處士之所著也凡若干卷
槩言神怪奇異之事言辭之藻麗也吟
咏之繁華也贈灸人曰者不可勝言焉
論語說曰子不語怪神矣茲書之作不
免懷詐欺人之謗予云不然厥士之志
于道者搜載籍之崇阿涵禮法之淵源
擇言擇行積善累德而施不滅之名若
夫庸人孺子之不知讀詩書耳無博聞
之明身無貞直之厚虛浮之俗日夕以
長側聞精微之言疾首蹙額啾々焉退

經典之沉深載籍之浩瀚辟如會輦而
鼓之何益之有如婢子之為書言據新
奇義極淺近怪異之驚耳滑聽之說人
寐得之醒為倦得之舒音是庸人孺子
之所好讀易解也如言男女淫奔必欲
深誠幽明神怪則欲覈理雖非君子達
道之事願欲便庸孺之監感而已
寬文六年龍集丙午正月下斡

雲樵

伽婢子惣目録

一 高上河原宗義新文上條の久と書事

久者次黄金と叩て扶都とる夕夕名と去物

二 瑞の長次十津川乃仙境入事

高ね乃らり帯付 松坂平次二世と闘事

新竹小浜を賣妖女事

三 濱田と共忠業れ着と阿く事

蜂谷源を御冠小なる事

牡丹灯籠

友系基頼の海賊と書事

四 浪系新島周魔王と對決乃事

船田たを着れらるりの事

花作七郎一膳小舟年々業記乃事

入棺の尸魁怪事

那須忠をが毒の幽霊物怪の事

五 長柄僧が精乃精を工に書事

烏丸安太郎の勇士の亡魂と書く徳將と評事

蜀山之内慈照源ふより火難と述る事

系集人伝冠始乃事

六 伴野老庫お化境事

岩田の刀自見義彦より奪て長生物語の事
友井信六極女六城燈と傳ふ事
物乃のり見の事

長身杖を白骨の妖物小逢ふ事

七 伏見に書文絵馬乃事

菫原次房の書文絵馬乃事

花加友が術を乃事

小山田記内契曲意事

極田津六津田彦八と高と争ふ事

夏長九太海門極坂河川が曲意事

八 長瀬國乃事

岩田又六郎書白の神の加護と事

性海康徳の神小逢く大蛇と殺す事

長長巻の巻物乃事

偶屋巻次乃事

屏風の絵人形躍事

九 安達寺平次親の御うさぎ事

下界に仙境の事

中取まの正曲意小逢事

人面瘡の事

丹波必咎くは鬼女の事

十 守文乃妖物乃事

畠谷式部が葛水神とらるる事

上杉憲政息女海子の事

竊の術れ事

漁龍付花馬風乃事

了仙英秀付天狗乃事

十一 栗栖野強鬼乃事

土佐の金物神付金麩の事

吉田源長乃事

七歩蛇乃事

飛泊友徳龍遊りの事

大橋海舟が魚籠の妖物乃事

十二 梅乃妖怪乃事

芦崎ねる乃事

厚狭が死霊乃事

白石忠忠の射野蝶乃事

盲女と救て事とくふ乃事

石軍乃事

十三 親世者阿保能乃事





伽子卷一



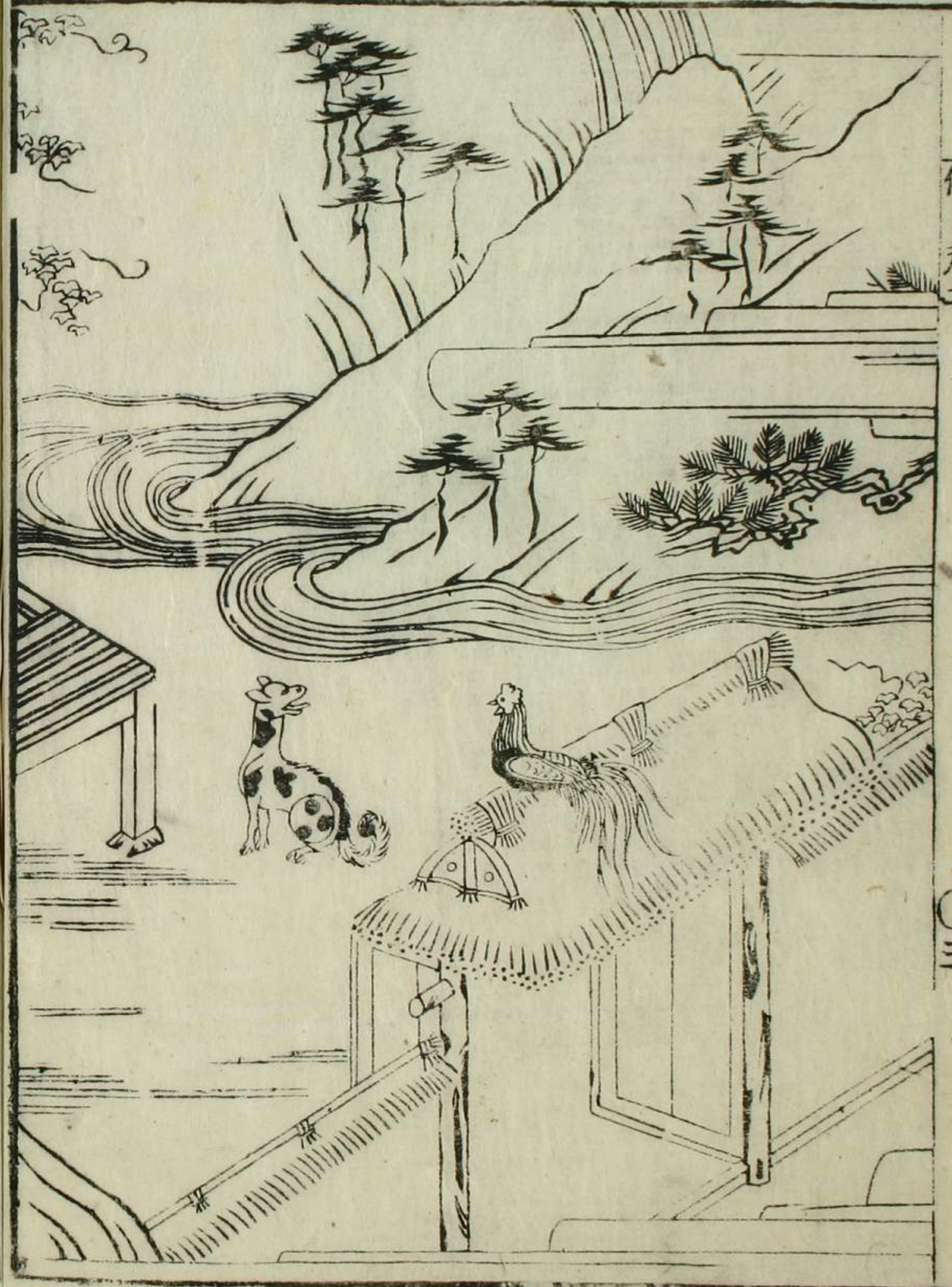
伽子卷一

〇十八

乃後ともがしわくその身根械ゆるその敷く徳世の庵と
 るけく周と腐骨とあらん事何ぞまうん海内よりふら
 がい思道なるる事なうらふくごめ一人の傍とせごふら
 城抱いふこれ地のたうかりのまらうごふも後世のの
 るよまをむごてとていしんやうりまらわ海かごそ
 こまうりまをば海百をうらうたむらりた人あれを
 なるうごごごごごごごごごごごごごごごごごご
 貴合十五のらんをらとごごごごごごごごごごご
 のごごごごごごごごごごごごごごごごごごご
 よりの二十日にあごらふ貴女持ちもてまらごごご
 て海よりあごのれごごごの貴女にのり。商人となり
 か。貴くはとていごごごごごごごごごごごごごご

うらうらららら。そのくら水禄廣平の年ね水運の事
 て。海田島のためおごごごごごごごごごごごご
 らららららこれ。日此地たよむらりたり。一城
 のねりのとあまの。あごごごごごごごごごごご
 おあごごご。貴女はらららららららららららららら

仙婢巻一終



仙臺

二

